

社会運動論研究会

代表者：YANG Yushuang（社会学研究科博士後期課程4回生）

研究会メンバー：OUYANG Shanshan（先端研究科一貫制博士課程7回生）、QU Honglin（先端研究科一貫制博士課程6回生）、峯桃香（社会学研究科博士後期課程2回生）

研究会の目的

本研究会において、各メンバーはそれぞれの研究対象を取り組む中に、社会運動内部におけるマイノリティーが排除されやすいという問題が存在する点に気が付いた。この関心のもとで、インターセクショナルリティ(交差性)概念に焦点を当てた。インターセクショナルリティとは、人種やジェンダー、性的指向、階級、国籍、障害などの属性が交差したときに起こる差別や不利益を理解する理論枠組みかつ方法論である。そこで、本研究会のメンバーはそれぞれが研究するフェミニズム運動、LGBTQ 運動、障害者運動の事例を、交差的な視点で考察することで、今年度には運動内部における覇権的文化の生産／再生産、社会運動の自己批判／自己革新の可能性と実践を検討する。

開催内容

★論文講読会や研究発表会 8回 運営計画会議を含む通算9回開催

運動論に関する文献・論文の輪読を行うことを活動の基本とし、担当メンバーがレジюмеを作成し、発表した。各メンバー自身の研究事例の検討報告も行った。

研究成果と発表実績

【研究成果】

インターセクショナルリティは「マイノリティー」といわれる全ての要素をマンペンなく取り入れて見せかけの平等を達成することではなく、支配のパターンを識別し、それを抵抗する思想であるという認識が共通した。ゆえに、インターセクショナルリティの応用には、それぞれの文脈が重要であり、とりわけ当事者の経験が欠けないのである。研究者として、インターセクショナルリティという理論を自分の研究実践にも取り入れることの重要性を再確認した。

【学会発表・査読あり】

○Yang, Y. (2024). "Affecting Feminist Identities in the Age of Neoliberalism and Grassroots Activism," International Postgraduate and Academic Conference, Taipei, Taiwan, February 2025.

○峯桃香, 『銃後女性』の戦争責任に関する一考察——『銃後史ノート』(1977-85)における葛藤, 日本平和学会, 2024年10月.

○曲虹霖. 「《黴瘡秘録》的話語与表象—傳統医学視角下的疾病与社会象征—」, 京都・ソウル東アジア次世代フォーラム in Kyoto, 2024年12月.

【論文・査読あり】

○Yang, Y. (2024). "Ambivalent Effects of Anger in Chinese Feminists' Refusal to Patriarchal Marriage and Family," *Social Movement Studies*, DOI: 10.1080/14742837.2024.2369603.

○欧陽珊珊(著), 2024, 『障害のある性的少数者』の若者がいかに社会運動に参加しているのか——日本とドイツにおけるLGBT運動の比較から. 田野大輔・吉田純(編)『日欧若者文化・ライフスタイル研究4巻』山岡記念財団, 9-17.

○Ouyang, S., Robinson, R., and Kamenetsky, S. B. (2024). "Breaking Windows and Mirrors: The LGBTQ+/Disability Community's Representation in Japanese Media," *Asia-Japan Research Academic Bulletin*, 5, 31-41.

○曲虹霖, 「中国伝統医学における黴毒のディスクール」『医学史研究』106号 (2025掲載決定).